



食と暮らしを守る社 天王坊稲荷神社



食えること。働くこと。家族と暮らすこと。
天王坊稲荷神社は、人が生きていく日々の営みに寄り添い、
食の恵み、家庭の安寧、商いの繁栄を願うお稲荷さまです。



御神徳

衣食住・家内安全・商売繁盛 食の恵み・災難除け



食の恵み

日々の食に感謝し
食に困らぬよう願う



商いの繁栄

仕事と商売が
栄えることを願う



家庭の安寧

家族の暮らしが
穏やかであるように



よの木の傍らには、大黒さま・恵比寿さまをお祀りする「おしゃごじ二福神」が
お祀りされています。



戦火を受けた、黒い狐。

災いを受け止め、黒狐となる。



岐阜空襲の戦火に包まれた境内。

鳥居や狐の像は、火に焼かれ黒い焦げ跡が残りました。

その姿は、今も当時の記憶を伝えています。

その黒くなった狐を

「**災いを受け止めた黒狐**」として大切にしています。

厄や災いを受け止め、福へと転じることを願うと同時にその時代を忘れないため。



今も変わらず、境内を見守る黒狐。
受け止めたものは、やがて福となる。





狐が集う、よの木。

古くから、狐が榎(えのき)に集うという伝承があります。



歌川広重筆の名所江戸百景

「王子装束ゑの木 大晦日の狐火」の浮世絵にも、狐たちが榎の下へ集う姿が描かれています。

天王坊稻荷神社もまた、「よの木」と呼ばれる榎が境内にそびえています。

このよの木は、狐たちが集う木と考えられます。

集まった狐たちは――

会議をしていたのか。宴を開いていたのか。

それとも、どこかへ向かう相談をしていたのか。

今も、私たちには見えないところで、狐たちが集まっているのかもしれない。



焼けても、また芽吹く。



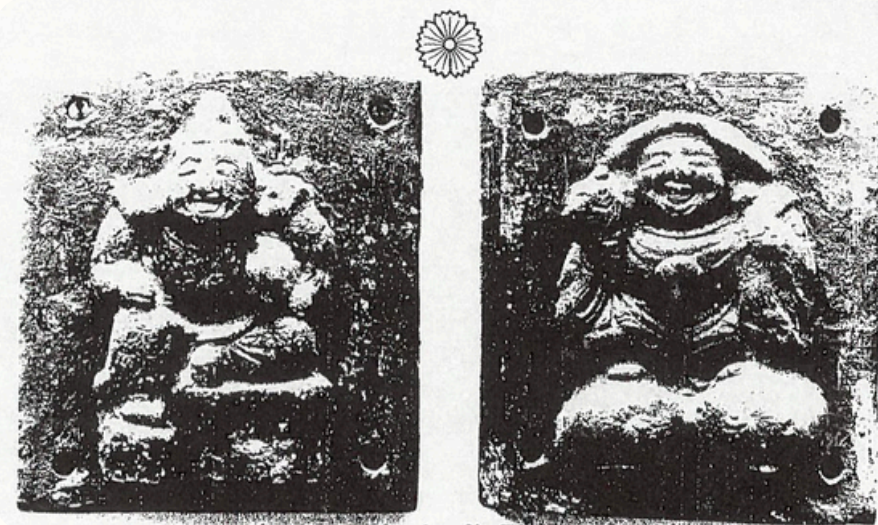
社記には、かつてこの地に樹齢七百年以上、幹周り約八メートルとされる大木があったと記されています。その大木は戦火を受け、神社の一部を守るように内部が焼け、火が収まると、音をたて倒れたそうです。しかし、その場所には再び命が育ち、現在の「よの木」へと受け継がれています。





食を支え、 暮らしを豊かに。

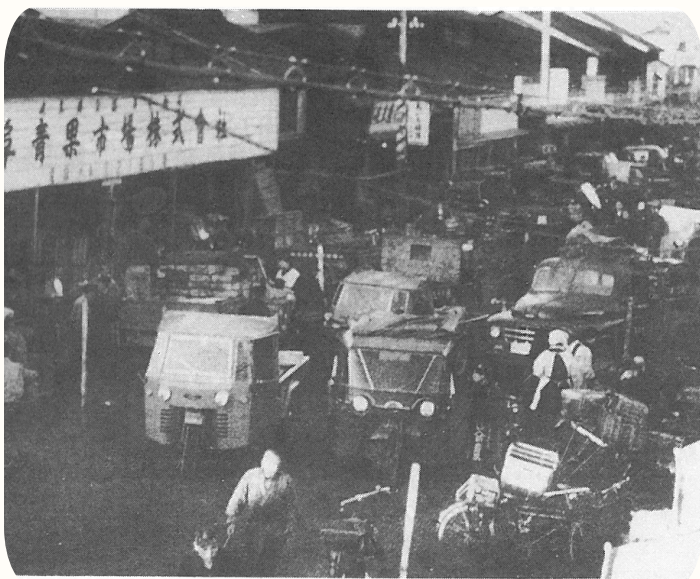
人々の営みのそばに、これからも。



おしゃごじ二福神

よの木の下には、大黒さま・恵比寿さまをお祀りする「おしゃごじ二福神」があります。

「塞神」ふさぎの神として災いが外から入るのを防ぐ神として、人々の暮らしを守ると考えられています。



人と物の集まる祈りの場と商いの場

江戸時代から「関みち、郡上街道」と呼ばれる街道のサイカチの地は、山間部から炭や薪、木材などが運ばれ、平地の産物とつみかえる、休憩所と市場で賑わったが、道が狭く、交通の障害がしばしば起こった。

そこで、広い土地があった、神社の参道沿いに商店が移動し、市が立ち、商品が並び、多くの人で賑わった。

その後、現在の中央卸売市場の地へと移動する。



人が巡り合い、恵みを分かち、暮らしが満ちる。



人が巡り合う
得意や恵みを
分かち合う



商いの繁栄
衣・食・住がめぐり
暮らしを支える



家庭の安らぐ
暮らしが満ち
家族の日々が穏やかに



その巡りを、稲荷の神さまは見守ります。

